

地域資源を生かした探究活動によって生徒は何を学んでいるか ——生徒を主語にした高校教育の取り組みの成果と課題——

研究代表者：和歌山大学教育学部 丸山範高

共同研究者：和歌山県立日高高等学校中津分校 網代涼佑

1. 研究の目的と背景

本研究の目的は、小規模高校における地域資源を生かした総合的な探究の時間を通して生徒たちは、どう主体的活動を推進し、どのような学習を成し遂げているのか、そして、学習成果からどのような未来の展望を拓いているのかを解明することである。

総合的な探究の時間に関わる先行研究では、教材開発・指導方法・カリキュラム開発など、多岐にわたり数多くの研究が展開されているが、地域資源を生かした活動で、かつ、生徒視点での学びの解明に焦点を絞った研究は十分行われていない。また、生徒視点での学びの解明に焦点を絞った研究では、中・大規模高校の生徒を対象とし、かつ、個々の生徒の興味関心に応じた多様な課題への取り組み状況を解明する研究が多い（高橋・村山 2006）（高橋 2007）（登本・齋藤・堀田 2024）。

ところで、本研究で対象とした実践は、活動の歴史が浅く発展途上にあるため、教師の指導が、活動企画の立案・運営、地域等学校外部との交渉など、生徒の学習の枠組み整備に偏りがちであった。したがって、活動過程での臨機応変な生徒への助言はなされているものの、一人ひとりの生徒個々の過去・現在・未来の学びを見据えた計画・実践が意識的・計画的になされていたとは言えない。

以上のような先行研究および実践の現状をふまえ、小規模高校における地域資源を生かした生徒全員共通テーマのもとでの各種探究活動実践を取り上げ、そこでの活動を通して生徒は何を学び、どのような力を身につけ、未来への展望をどう拓いているのかを明らかにする。

2. 実践の概要

本実践は、総合的な探究の時間における2・3年生合同の取り組みであり、地域資源の紀州備長炭を共通テーマとした以下の3つの班に分かれて活動した。

○紀州備長炭焙煎珈琲販売班

紀州備長炭製造業者との共同事業として、紀州備長炭の制作過程で発生する商品にならない規格外の備長炭を利用したビジネスプランを生徒が企画、商品化し、販売等を体験する。生徒たちが紀州備長炭で焙煎した珈琲豆やドリップした珈琲を商品として販売するとともに、この事業の目的をPRする。地元で開催されるイベントや、夏の野球選手権大会が開催される紀三井寺球場での販売体験も実施する。その他、日高川町と提携している狭山市のイベントや、連携している大和大学の学園祭にも参加する。昨年度から販売を経験している3年生が中心となり、ドリップ方法や販売方法やポスター作成などを2年生に教えながら進めていった。

○紀州備長炭を利用した商品の開発班

珈琲をドリップした際に発生する珈琲がらと紀州備長炭の規格外の炭を活用した消臭剤の開発を行う。消臭剤の入れ物には廃棄される衣服を再利用することで、よりSDGsを意識

した取組として広げていく。スポーツメーカーと地元スポーツ店に協力してもらい、廃棄されるジャージの生地などを再利用する。消臭剤の入れ物の作成には、地元のスポーツ店に協力してもらい、裁縫も実施してもらう。地元店舗で商品を販売することで地域経済の活性化も目指す。3年生が中心となり消臭剤の容器のデザインを検討し、野球ボールをデザインしたものに決定した。3年生と2年生が合同でサンプルを作成したり、配色を決めたりするなど、学年を超えた共同活動が展開された。

○紀州備長炭に関する絵本作成班

「おやさいクレヨン」を制作している有田地方の企業と連携し、おやさいクレヨンを使い、紀州備長炭の誕生や伝統を伝えるための絵本製作を行う。2年生が中心となり、アイデア、文章作成、構成などを検討した。地元の絵本コンクールに応募したり、子どもたちに読み聞かせをしたりするなどの活動を計画している。

3. 調査方法・結果

2・3年生全生徒を対象に活動前半の7月と後半の11月に計2回の質問紙調査を行い、興味深い活動や身に付けた能力、将来への影響などを記述させた。その中から主体的な活動を進めていると判断した4名の生徒を対象にインタビュー調査を行った。ここでは、4名の生徒のインタビューでの語りを分析対象としている。

生徒4名が語った内容を「経験」と「展望」とに分割・整理し、学習活動を通して身につけた能力に関する語りを「経験」として、また、未来につながる能力に関する語りを「展望」として、それぞれ括っている。

なお、インタビューでの生徒の語りは、個人情報保護や紙面の制限のため、一部表現を省略している。また、前後の文脈が理解しづらい箇所については、文脈を盛り込んだ表現に修正している。生徒の語りは《 》とし、語りの内容を抽象化した概念を【 】と記述している。

生徒4名とも地域資源である紀州備長炭を共通テーマとした活動に取り組んだが、それぞれが中心的に活動した内容は、次の通りである。

生徒A（高校2年）：絵本制作／生徒B・D（高校3年）：コーヒー製作・販売／生徒C（高校3年）：消臭剤制作・販売

3-1. 経験

ここで取り上げる生徒の語りは、インタビューにおける次の質問への回答に相当するものであり、生徒視点から捉えた学習実態を、活動成果・活動過程・教師による支援の3観点に分けて記述する。

○今年度の総合的な探究の時間で行った活動で、最も印象深かったこと何ですか。

○活動を通してどんな力が身についたと思いますか。

○先生からの助言の中であなたにとって参考になった助言は何ですか。その助言はあなたの学習にどのように影響しましたか。

①活動成果としての学習

生徒A：【他者に配慮した表現選択】

《小さい子とかにわかってもらえるような言葉づかい、やわらかい言い方が、今回の作業の中では身についたと思っています。》

生徒B：【地域の魅力認識】

《地元の紀州備長炭っていう存在は知っていたんですけど、世界に誇れるとか、日本に誇れるというところまでは知らなくて、その知識が深まったところが一番良かったところで、自分の地域のものがニュースに取り上げられたり、新聞に載ったりとかで、誇れるものになったのは、地元民からしてうれしいです。》

【経営感覚】

《ここまで大きな活動できると考えてなくて、商売、物を売るということは、人生これから先もつながってくると思うので、その活動はいい経験したと思います。ただ売るじゃなくて、客を呼んだりとか、机の配置とかも考えないといけないし、チラシ・ポスターとか作ったりとか、いろいろ考えて、ただ売るだけでなく、だいたい考えながらやったので、この先の進路にもつながるかなあとと思います。》

生徒C：【エシカル生産】

《コーヒーを作ったガラを捨てていたんですけど、それを新しくエシカルというということで、それを乾燥させて、紀州備長炭の端材と混ぜて消臭剤を作りました。使わない部分をどう使うかというのを考える力が身につきました。》

【合意形成に向けてのリーダーシップ】

《これはないだろうと思うような発言でも、1回やってみてデザインを作ってみて、それであかんかったら、これにしようと言ったら、みんな認めてくれました。もともとのタイプは他人任せみたいな、何でもいだろうみたいだったんですけど、その中で自分がリーダーとしてやらないといけないなあというのがあってやりました。》

生徒D：【活動調整】

《野球やっているところでコーヒー販売をするというのは、特に高校二年生の時はベンチにも入りながらコーヒー販売にも行くという、どっちも考えなければならないという、今までにない感覚というか。》

【対人関係の拡張】

《販売をすることによって他の人と関わることも増えて、地域の人であったりとか、逆に向こうの人たちの意見も聞けたりして、自分たちの意見も話せてっていう、どんどん知識が広まっていくっていう感じです。》

【活動の省察】

《2・3年合同で活動した成果は、2年生ははじめてでわからないんで、それを自分たちが教えることによって、自分たちがやってきたことを再確認することもできて、今まで抜けていたことも思い出せて、逆に良かったと思いました。自分たちだけじゃわからないこと、2年生がいたからこそ、こういうこともできるんだなと逆に広がったこともありました。》

②活動過程での学習

生徒A：【共同活動《合意形成》】

《当初、何を一番伝えたいのかが自分たちの中でまとまりきれなかったが、話し合いの過程を経て、自分らのコーヒー販売の取り組みも入れたら、まとまりやすいんじゃないかということで、コーヒーを炭の子たちに売らせて森を守っていますというお話しに落ち着きました。》

【共同活動《役割分担》】

《私たち中心メンバーは、みんな絵を描くことが苦手で、先生からいろいろ言ってもらったり、1年生の絵を得意とする子に助けてもらったりしながら、こっち何色がいいんじゃないとか、見やすい色こっちじゃないとか、言ってもらったりして、いろんな人に助けてもらいながら作業を進めました。》

生徒B：【経営感覚】

《自分らで利益出るように、竹とかの再生可能なコップとかストローとか使って、なるべく赤字にならないように考えてやりました。》

【チーム力向上のためのリーダーシップ】

《みんなの気合い、気持ちみたいなところをどう高めるかが難しくて、他府県の生徒から頼られるから自分ら地元出身者ががんばらないかん、そこでどう地元の魅力を他府県の子らに伝えとか、他府県の生徒から山しかないとか言われたんで、そこが一番難しかったです。》

【地域情報の収集】

《新聞読むようになったんです、この活動始まって。新聞を開いて地元のニュースを見るようになって、携帯のアプリでニュースが入ってくるように設定して1日1回そこを確認したりとか、他府県の生徒に地元の不満をいっぱい言われるけど、ここもそんなに悪いところじゃないというのは伝えたいから、いっぱい調べて勝てるところを見つけようと努めています。》

生徒C：【共同活動《合意形成》】

《紀州備長炭にもともと消臭効果があるって知って、コーヒーの使っていない部分も何か使えないかと話し合いをした時に、コーヒーにも消臭効果があるっていうことを知ったので、一緒に入れたらどうなるかっていうのを気になってやってみたら、という感じです。》

生徒D：【共同活動《役割分担》】

《コーヒーを作るというのは自分たちがはじめてだったので、作ることにに対して自分たちでできるかどうか不安はすごくありました。だれか一人ができないところを他の子がカバーしてという11人の中でできる子・できない子の役割分担でカバーしながら、を繰り返してきました。》

【知識伝達のリーダーシップ】

《僕はコーヒーの入れ方等を学んで、みんなに伝えるっていう感じです。》

【課題解決行動力】

《コーヒー専門の方に来ていただいて、コーヒーの入れ方とか、温度とか、時間とか、を教えていただきました。1回では覚えきれない部分もあったんですが、メモとか取ったりして、最初はタイマーで計ったりとかしながら、感覚で覚えるというか、数をこなすっていう感じです。》

③教師の支援による学習

生徒A：【他者に配慮した表現選択】

《先生が言ってくださったんですけど、言葉づかいも「擬音語とか入ってた方が刺激なるんじゃない」というのがあり、擬音語って刺激になるんだと、私の中で発見がありま

した。》

【共同活動《合意形成》《役割分担》】

《担任の先生に「一人で悩むんじゃなくて、もっとみんなのことを信用して、みんなに意見聞いたらどう？」とか「先生はこう思うけど、あなたは思う？」とか、問いかけをしてくれたんで、私はそれがすごい救いになりました。自分一人で全部やってしまおうっていうタイプの人間なんですけど、今回に関しては、わりとみんなの意見を聞いたりとか、助けてもらったりとかできたような気がします。》

生徒B：【経営感覚】

《値段設定とかだいたい考えて、こっちは赤字でないようにしないとイケないし、向こうにも買ってくれる値段にしないとイケないし、だいたい先生と相談しながら決めました。最初、安く売ろうやみたいな、いっぱい売った方がいいんじゃないみたいな感じだったんですけど、それじゃあ豆買っているお金とか、コップとかも買っているお金を差し引くと、赤字になってしまうから、先生から話をきいて、もう少し値段を上げようとなりました。》

【デザイン力】

《商品ポスターについて先生の助けを得ながら自分らで作ったんです。最初は値段ぐらいしか書いていなかったのが、先生の助言をふまえて、良さを伝える文字を入れてみたりとか、色合いも、中津を強調できるような色、山の色、緑入れたりとか、そういうのはこだわってやったりしました。》

生徒C：記憶に残るような支援はなしと回答

生徒D：【活動モチベーション】

《はじめてやることだったので、売れるかどうか不安というのが一番あるんですけど、「売れなくても大丈夫」っていう、最初は売れないみたいな考え方を教わったのが一番自分たちにとっては、自分たちでもやっていけるかなっていう自信にはなりました。》

3-2. 展望(未来につながる力)

ここで取り上げる生徒の語りは、インタビューにおける次の質問への回答に相当するものである。

○この探究活動があなたの将来にどのような影響を与えると考えますか。

生徒A：【他者に配慮した行動】

《今回、いろんな人の立場になって考えるっていうので絵本を作ったんですけど、それが自分の今後の活動にすごいい影響を与えてくれると思っています。》

生徒B：【チーム力向上のためのリーダーシップ】

《みんなで話し合ったりとかして、みんなも同じ気持ちにして、ちょっとでも発展できるように、そこの特産物をPRとかしていけるような人にはなりたいです。》

生徒C：【コミュニケーション力】

《人前で話す力がついたので、多くの人の前で、多くの人と関わるような仕事ができたらと思っています。自分から自発的に発言するというのができていなかったんで、自分から発言できるようになってるかなと思います。》

生徒D：【経営感覚】

《コーヒーだけに限らずに、将来も販売とかをすることがあると思うんで、販売に対し

て、どんだけ時間を費やすとか、何をしたらどういう人を買ってもらえるとかというのを考えながらやっていける。》

4. 考察と課題

分析結果より、生徒たちは、活動過程において、活動成果として、教師の支援を通じて、さらには、未来へつながる能力として、地域資源を生かした探究活動を通して、幅広い学習機会を得ていたことがわかる。【経営感覚】など社会経済活動に関わる能力、【他者に配慮した表現選択】など対人コミュニケーションに関わる能力、【合意形成に向けてのリーダーシップ】【共同活動《役割分担》】などチームワークに関わる能力、【活動調整】【課題解決行動力】など自己管理スキルに関わる能力など、個々人に閉じた知識習得学習では得られない、共通テーマに基づく集団での正解の定まらない探究活動ゆえの能力の獲得を生徒たちは認識できていると言える。

高橋（2007）では、総合学習の満足度の高い生徒の意見を「進路・将来への繋がり」「他者との交流・体験を通じた成長の手ごたえ」「新たな学習体験の獲得」に分類している。また、登本・齋藤・堀田（2024）は高校時代にもっと身に付けておきたかった知識・スキルを調査しているが、その上位には「コミュニケーション能力」「言語能力」「プレゼンテーション力」「自己管理力」があがっている。両先行研究には10年以上の隔たりがあるが、対人関係や自己の成長に関わる能力は一貫して重要であることがわかる。そして、これらの能力は、本実践で生徒たちが認識している能力と大きな差異はない。また、本研究は、生徒の興味関心に応じた多様なテーマでの探究学習を調査した先行研究とは異なり、教師主導で計画した地域資源を活用した共通テーマでの探究学習を取り上げたが、学習を通して生徒たちが認識している能力には先行研究と大きな差異がないことがわかる。

今後の課題は、生徒一人ひとりの学びに寄り添った評価の充実である。本実践は、発展途上という事情もあり、探究活動の仕組みづくりの構築に教師の活動が偏っていた。探究活動を通じて育まれる能力を概念として生徒に意識化させ、活動過程でそれぞれの能力の到達度と今後の展望を持たせて、継続的な活動を支援していくことが教師側の課題として求められる。

文献：

- 登本洋子・齋藤玲・堀田龍也（2024）「高校における探究的な学習と資質・能力に対する学習者による省察と展望」日本教育工学会『日本教育工学会研究報告集』pp.134-137.
- 高橋亜希子・村山航（2006）「総合学習の達成の要因に関する量的・質的検討—学習様式との関連に着目して—」日本教育心理学会『教育心理学研究』54, pp. 371-383.
- 高橋亜希子（2007）「卒業研究過程における高校生の継時的な変化—生徒から見た高校総合学習の意義と課題—」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』16, pp. 43-56.